

中学生の「税についての作文」

大川税務署長賞

日本国民である意味

大川市立大川桐英中学校

三年 今 村 桃 菜

「あつ、あと二円足りん。桃ちゃん二円だけちようだい。」
「イヤよ。二円あげたら桃ちゃんが買えなくなるもん。」

私が妹とこんな会話を交わしたのは、四年前の真冬の日だった。祖父母の家に家族で行っていた私たちはだんだん退屈になり、少し散歩しに、外へ出て行った。しかし、あまりの寒さに耐え切れず、近くにあった百円均一へ駆けこんだ。温かい飲み物を飲みたい一心で飲み物売り場へ足を運んだ。温かいミルクティーを見つけ、値段を見ると表示されていた値段は税込み百八円。しかし、私はその時ふと思いついたのだ。

二ヶ月ほど前から消費税率のほとんどが八パーセントから十パーセントへ引き上げられていたことに。当時、小学五年生だった私と三つはなれた小学二年生だった妹にとって、百八円だったものが百十円になってしまふ、このたった二円の差は大きな差だったのだ。理由は私がもらっているおこづきはほんの少し、妹はおこづかいすらもらっておらず、妹の手元にある小銭もいつか母にもらった何かのおつりなどが少しずつたまってやっと集まったものだからである。お金のことなんて何も知らなかった私たちにとって消費税の引き上げも

消費税の存在すらも意味のわからないものだった。

そんな私の考えが変わったのは小学六年生での租税教室が行われたことがきっかけだった。一年前よりは知識がついていた私は税金とは国民から集める資金のようなものということは知っていたものの、やはり理解はできていなかった。授業が始まると税務署から来て下さった一人の女性のお話が始まった。約五十種類もの税金があること、小学生一人あたりに一年間で約九十万円程が税金で賄われていることなど教えてもらう一つ一つのことに驚きをかくせない中、私が一番衝撃を受けたことは税金がなくなると私たちの生活が不自由になることだった。正直、税金なんてなくなっても私たちの生活は今まで通りだと思っていた私はとても驚いた。例えば、私が乗ったことのある救急車にお金がかかったり、学校に行けない人が増えたりと他にも数えきれないほどあるが、どれも楽しくなるものはなかった。そして、租税教室が終わったときには税金は必要不可欠であり、消費税をいやがるような思いは一切なかった。

私はまだ中学生で働いてもいないし、払える税金もほんの少しだと思う。しかし、ほんの少しの役割を果たせるのなら、私は国民の一人としてしっかり役割を果たしていきたい。そして大人になったときに納税をかかさずするために今は税についてちゃんと勉強をしたい。それが私にとって日本国民である意味の一つだと思う。